谷戸の風 ㊻

春が来た

山内静夫

今年の冬は例年以上に寒さのきびしい日が多かった。大寒の前頃が特にひどかった。例年通りと言えば不思議でもないが、県下でも暖かい地域と言われている鎌倉でさえも朝方の冷えこみは応えた。白いものが舞ったりもした。二月は最も寒い筈なのに、一方では春近しを思わせるところもある。不思議なもので、気持ちの方が先へ先へと向いていく。三月という季節にはそれだけ人の気持ちをなごませるものがあるように思える。

二ガツ、四ガツは気のせいか音のひびきにも暗いものがあるが、三ガツと聞くだけで明るい前向きな気分を感じるから不思議だ。二月は特に話題がない月だ。三月もお節句以外は桜が咲くまで華やぐことがなく、四月の方がむしろ花見シーズンとされているようだ。

「三月さくら」と語呂がいいせいで大分得をしているように思う。

その春ももう目の前だ。今年は四月から五月にかけて日本は大きな変革を迎える。国民にとってそれをどう迎えればいいのか、平成についで二回目の変革を経て、この国はどういう変化を見せようとしているのか、期待半分と不安半分である。

私が不安なのは、日本の気候である。日本の気候は、こんな大雑っぱなものでなかった。0度近い日があるかと思うと急に十七、八度の暖かさがくる。体調の方がまごつく始末である。

いつの頃からか、父より長く生きたいという思いがあったが父は九十四歳の二月に亡くなったので、今やっと父の年は越えたのだ。やっと年齢のことが意味をもって感じられる日がきたと変な納得のある日々である。

やっと三月になった。

木版画　藤本宿

新宿稲荷神社で餅つき

修繕費募り祭りや市

逗子海岸西浜に近い披露山の麓に鎮座する新宿稲荷神社の2月10日の初午祭で、神社の修繕を呼びかける餅つきが行われ、市内外から百人以上が集まった＝写真。

付近に古墳時代末期の横穴墓もある歴史ある神社だが、昨秋の台風で社殿の屋根が破損し、雨漏りで床の腐食も進んでいる。修繕を目的に「新宿稲荷神社の修繕費の寄付を募る会」（田中克己代表）を発足し、餅つきで7・5㌔の餅を販売した。

同神社は昨年9月の納涼祭で30年ぶりに子どものお囃子と大人神輿が復活し活気を取り戻しつつある。地元の川島直子さんは「子どもたちのためにまちに祭りがあってほしい。この神社は心のよりどころ」と話す。

今後は毎月17日の「稲荷の日」に因んだ「新宿稲荷市」も行う予定で、次回は3月17日10時30分～14時。逗子名物アカモクを使った寿司「新宿稲荷」の販売のほか、市民手作りの店が並ぶ。

氏子会長を兼務する田中代表は修繕費150万円を目標に寄付を募る。寄付はゆうちょ銀行00220―0―105855「新宿稲荷神社の修繕費の寄付を募る会」まで。（K）

支え合いのまちづくり

葉山でフォーラム

誰もが住み慣れた町で最後までいきいきと暮らせる地域づくりを目的に県社会福祉協議会が主催する「協議体でつながろう！地域支え合いフォーラム・葉山」が2月13日福祉文化会館で行われ、約百人が参加した＝写真。

聖徳大学豊田宗裕教授の講演に続き、町社会福祉協議会から、町内会・子供会・老人会・民生委員・商店会・診療所・福祉事業所などの人々がつながる葉山の「協議体」が、町内3地域（下山口・堀内・長柄）で今年度立ち上がったことが報告された。

独居者の共食の会「どんぐり」が、脳梗塞で倒れた仲間を支えることをきっかけに活動を広げたり、堀内で昨年から始まった「互近所ガーデン」の取り組みは、デイサービスに通う認知症の高齢者が園芸リハビリを兼ね、庭造りを仕事として請け負う新しい試み。同施設の柴田康弘代表は「認知症の人が暮らしやすい町は、子どもも障害者も誰もが暮らしやすい町になるのでは」と話す。

町社協は「幅広い世代が参加できる輪をつくりたい」と来年度以降に残りの地域すべてに協議体の設置を目指す。（K）

文学つれづれ ⑰⓪

翁と乙女（十二）

赤羽根龍夫

厳粛なものこそ神聖であるーこれが世阿弥の築き上げた定義であり、彼はそれを宗教にまで当てはめようとした。

しかし、世阿弥とその後継者たちが、いかに「翁」が神聖なものであると主張しても、滑稽さのない「翁」などに人々は関心をしめさなくなり、世阿弥の時代からすでに「翁」は形骸化してしまっていたのである。「衆人愛敬」―民衆のだれからも愛されることを芸の基本としながらも、世阿弥は民衆を捨てたのであり、民衆もまた、世阿弥の、生きた宗教なき世界には関心を示さなくなったのであり、神事としての「翁」は日本各地の神社や祭礼の中で、厳粛かつ滑稽に、最近まで継承されていったのである。

今日にいたるまで神聖なものは厳粛であり滑稽であってはならないという定義は、教養ある日本人の考え方を呪縛し続けてきた。野上豊一郎のような自由な眼識力を持った人ですらそうだった。彼は「翁」がもし宗教的であるならば『あげまきどんどや』の如き猥雑な歌詞をなぜに交えなければならなかったか、説明がつかなくなる」という。次にそのことについて述べてみよう。

三番叟が五穀豊穣を祈願する舞で使用する黒式尉

「翁」では演者全員が舞台に登場すると、主役の翁（シテ）と地謡が座ったまま次のように謡い始める。

シテ　とうとうたらりたらりら。たらりあがりらりらりとう。

地　ちりやたらりらりら。たらりあがりらりらりとう。

シテ　所千秋さむらわう。

地　われも千秋さむらわう。

シテ　鶴と亀との齢（よわい）について、私は古代シャーマンの、笛や太鼓や梓弓による神おろしと同じで、舞台の上に神を下ろして翁が神がかりになるためであると思う。

次に鼻払い役の千歳が立ち上がりながら謡い継ぎ、千歳の舞となる。

ツレ　鳴るは滝の水。鳴るは滝の水。日は照るとも。

地　絶えずとうたりありうとうとうとう。

ツレ　君の千歳を経んことも。天つ乙女の羽衣よ。鳴るは滝の水。日は照るとも。

地　たえずとうたりありとうとうとう。

千歳が最後に滝の水にあてた足拍子をドンドンドンと力強く踏み、舞い収めてもとの座にもどる間に、シテの翁は白色の翁面をつけ、立ちあがって謡いながら舞う。

シテ　総角（あげまき）やとんどや。

地　尋（ひろ）ばかりやとんどや。

シテ　坐して居たれども。

地　参ろうれんげやとんどや

ここが野上豊一郎が猥雑な歌詞といっているところであり、もともとは催馬楽（さいばら）〔奈良時代の民謡を平安時代に雅楽の歌曲としたもの〕の「総角やとうとう、尋ばかりやとうとう、さかりて寝たれども、まろびあいにけり」から採ったもので、その意味は、髪の毛を揚巻に結うほどの幼い男女が、両手をひろげたほどに離れて寝ていたけれども、いつのまにか重なって寝ているよ、という性の交わりを暗示するものとなっている。

（神奈川歯科大名誉教授）

鎌倉朝日歌壇

香山　静子　選

築港に潮の香流るる朝市の釜上げシラスに舌つづみ打つ　葉山町　近藤　純

朝市の賑わいが直に伝わって来る。

幅海苔の小分けにされて干されたり近づく春の香を放ちつつ　片瀬　中村　喬

春を待つよろこびが溢れて出ている。

裸木の桜をつつく四十雀花の仕度をうながすごとく　今泉台　下田　和夫

作者自身の春を待つ思いも滲み出ている。

チェロによるバッハの調べの深々と凍てつく木の芽をそっとゆるめる　葉山町　近藤美知子

朝採りの鰹台の野菜みずみずし鰹玉はじけ仄か輝く　岡本　鳴海　紀政

作者自身の春を待つ思いも滲み出ている。

チェロによるバッハの調べの深々と凍てつく木の芽をそっとゆるめる　葉山町　近藤美知子

朝採りの鰹台の野菜みずみずし鰹玉はじけ仄か輝く　岡本　鳴海　紀政

いただきし菜花の束の数本を花瓶に挿せばわが部屋は春　笹目町　出蔵かおる

白き息吐きつつ弾む妻の声「梅が三輪咲きましたよ」　逗子市　木村　勲

「おはよう」と白き息吐く小学生「気を付けてな」と見守るおじさん　逗子市　湊　美根子

ふる里を捨てた長男という夫が「郷里は雪か」と予報につぶやく　大船　小笹岐美子

大寒に南風・東風吹きてつぼき散り蝋梅白梅ほころびにけり　辻堂　柳　蒼柳

我が妻と共に過ごして六十年背中流して労をねぎらふ　手広　高口　道宏

鎌倉朝日俳壇

星野　高士　選

〈天〉バス停に人それぞれの初音聞く　藤沢　一色千穂子

バス停という日常の場所をうまく焦点を合わせて詠えている。初音を聞いた喜びもよく出ていた。

〈地〉凍滝の下を流るる水の音　笛田　上田　満喜

凍滝でも下を流れる川は水の音を持っているのだ。

〈人〉猿曳の紐の自在を見てをりぬ　城廻　小美野京子

猿曳操る紐の方をしっかりと見ているとも学生の力。

淡淡と重なりあへり春の山　逗子市　佐藤　信子

いかにも春の山の起伏が見えてきた。

水動き薄氷動き右左　笛目町　出蔵かおる

薄氷の動きが読み手にも伝わってきた。

何んとなく振ってみたくて種袋　岡本　鳴海　紀政

中味を想像する心と春への喜びが作品になった。

江の島や音たて高きどんどの火　藤沢市　腰越　薫

淡雪を集めて子らは芝の上　逗子市　松原　三浦　和子

史実なほ暗し節目の実朝忌　金沢区　岩澤　正春

本堂に低き声あり梅の花　片瀬　國安　佳子

旅客船の過ぐる速さよ浜小春　本鵠沼　森田　順子

寒牡丹七十年の花鋏　川名　槇野あさ子

ぼんぼりを灯して淡き朧月　葉山町　近藤　純

白鳥や湖に温泉の湧くひとところ　逗子市　塩谷あい子

誕生日目柄確認初暦　材木座　羽賀　一男

病みてより命の重み春迎ふ　玉縄　篠田　祥子

鳥雲にスカイツリーの先見えず　大船　添田　洋子

寒空に悠然と舞ふ鳶一羽　手広　高口　道宏

春休み今甦る永福寺　梶原　吉田　健二

国なまり一言よぎる冬の街　植木　風見　玲子

鎌倉朝日
発刊協力グループ
朝日新聞
サービスアンカー

ASA鎌倉小町
材木座一―一〇―三七―一〇三
☎22―3236

ASA鎌倉中央
長谷一―一―九
☎22―1004

ASA北鎌倉
大船一―二三―一六松栄ビル3F
☎38―7322

ASA鎌倉深沢
常盤一―四七―二
☎31―1444

ASA大船西部
玉縄一―一四―一
☎46―6068

ASA大船南部
大船一―二三―一六松栄ビル3F
☎38―7322

ASA大船中央
大船一―二三―一六松栄ビル3F
☎38―7322

ASA腰越
藤沢市鵠沼藤が谷二―一―二三
☎0466―27―8716

ASA藤沢南部
藤沢市鵠沼藤が谷二―一―二三
☎0466―27―8716

ASA藤沢東部
藤沢市弥勒寺三―二―一一
☎0466―22―7409

ASA鵠沼東部
藤沢市鵠沼海岸二―一―一一
☎0466―34―6924

ASA鵠沼西部
藤沢市鵠沼海岸二―一―一一
☎0466―34―6924

ASA逗子
逗子市久木一―一―一一
☎046―871―2538

ASA東逗子
逗子市沼間一―四―四
☎046―871―6845

ASA葉山
三浦郡葉山町堀内一八〇八
☎046―875―0515

ASA金沢八景
横浜市金沢区六浦一―二一―一三
☎045―782―2859

ASA大船北部
横浜市栄区笠間四―一一―九
☎045―891―0986